

11
ダニエル
聖徒伝 220

メシア待望を 力として

ダニエル書11章1～35節

中間時代の苦難

アウトライン

0. イントロダクション

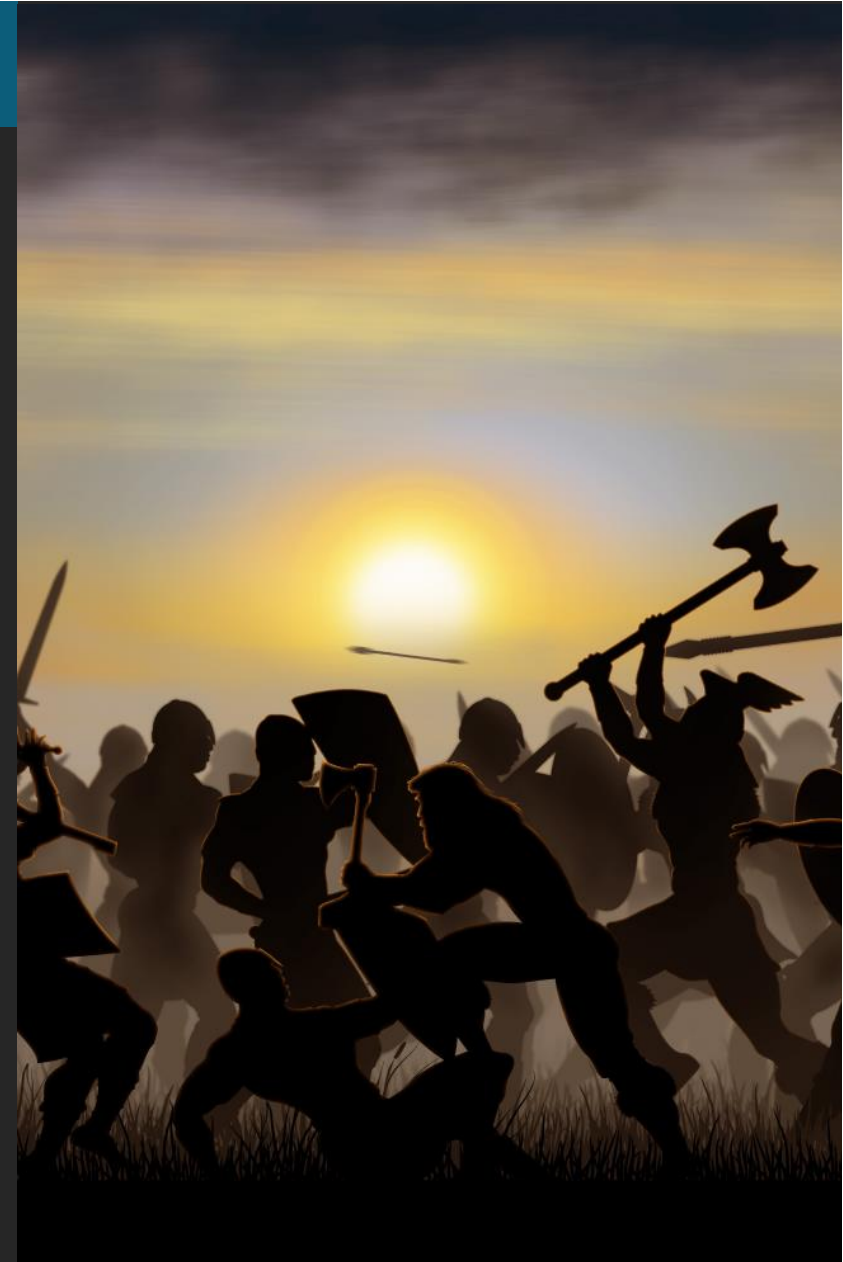
I. 中間時代 1～20章

II. 中間時代のクライマックス

21～35章

III. まとめと適用

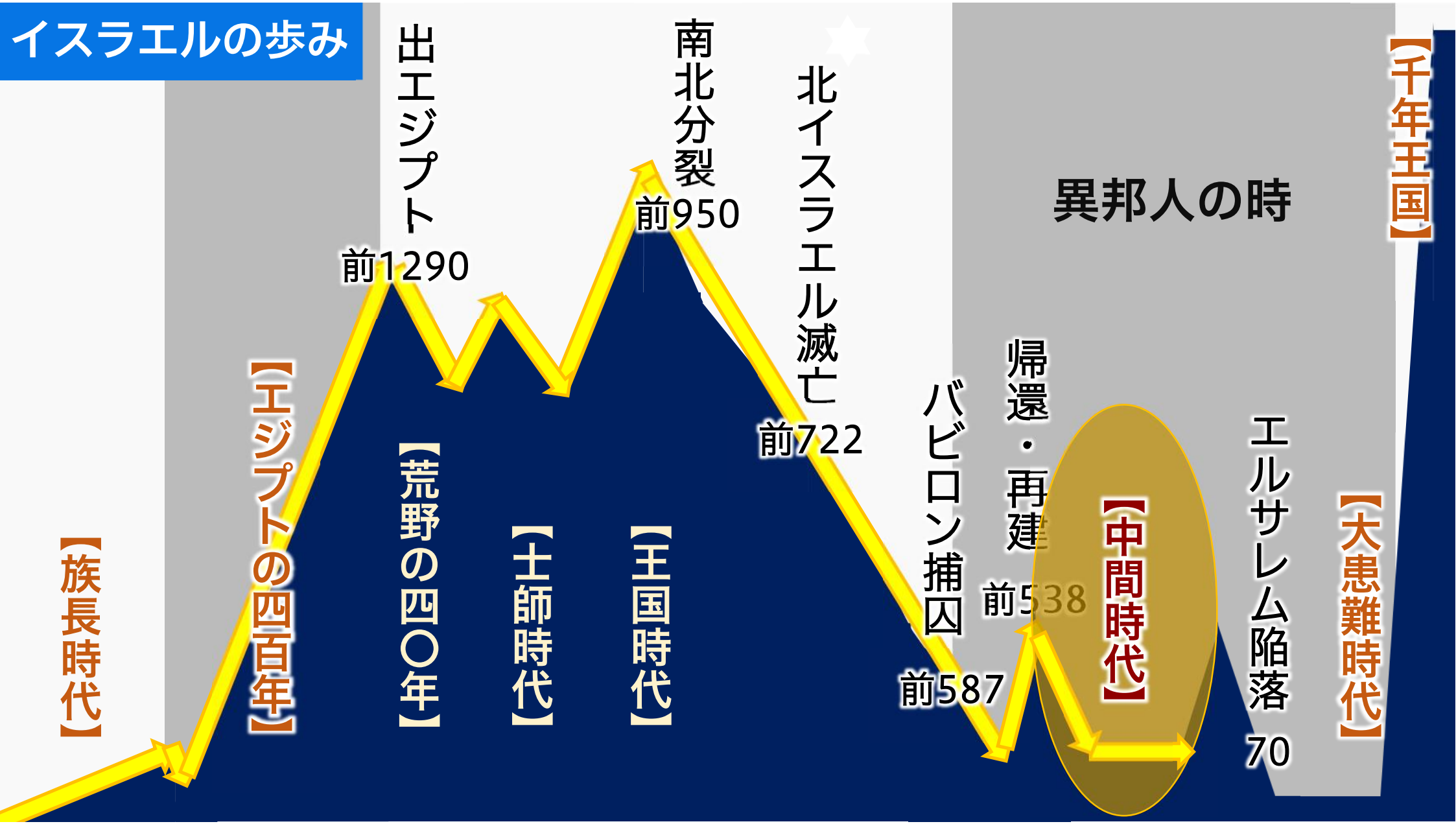
メシアを待ち望む信仰を力に



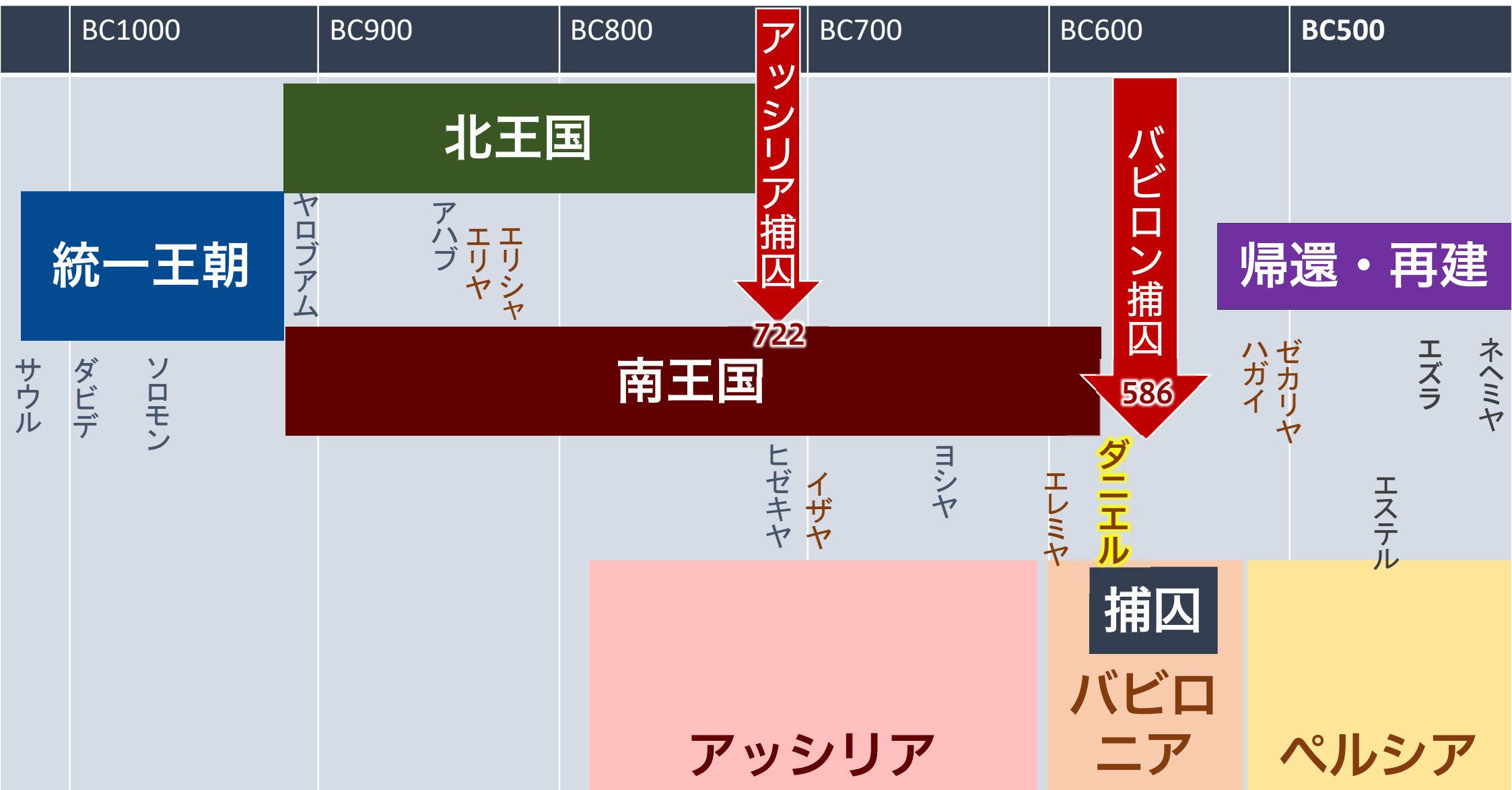


0. イントロダクション

イスラエルの歩み



イスラエル王国史



ダニエル書の構成

章	記述	言語	王国	王	内容
1章	歴史	ヘブル語	バビロニア	ネブカドネツアル	ダニエルの召命
2章		アラム語			つぎはぎの像
3章					炉に入れられた3人
4章					ネブカドネツアルの回心
5章					ベルシャツアル
6章			ペルシア	ダレイオス	ダニエル、ライオンの穴へ
7章	預言		バビロニア	ベルシャツアル	四頭の獣
8章		ヘブル語			雄羊と雄山羊の幻
9章			ペルシア	ダレイオス (キュロス)	70週の預言
10章					天の御使い
11章					帝国の変遷
12章					終わりの時

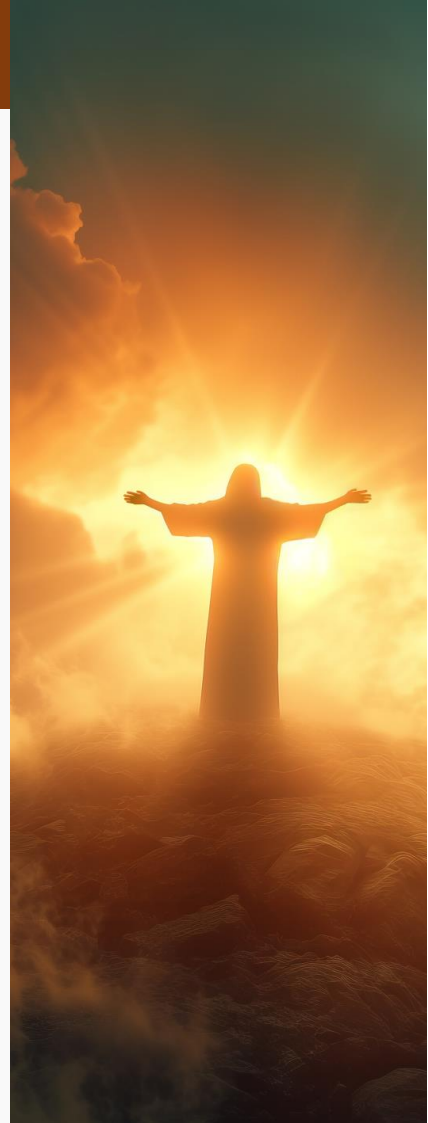
11章1～35節の背景

■ ペルシアのキュロス王の勅令により、捕囚から解放。
70年の捕囚の苦難にピリオドが打たれた。

しかし、帰還した民はわずかで、神殿再建も頓挫。

■ イスラエルをとりなし、3週間祈り続けたダニエルに
天使が現れ、不思議な幻を見せる。

■ 天使がまず告げたのは、間近に迫るイスラエルの苦難



旧約と新約の間の空白期 中間時代について告げられていく!!



I. 中間時代

ダニエル書11章1～20節

幻 靈的戦い ダニエル11:1

「私*はその彼*を強くし、力づけるために、メディア人ダレイオスの元年に立ち上がった。」

*ダニエルに現れた天使

*イスラエルの守護天使・ミカエル

■ 悪の軍勢・ペルシアの側に立つ墮天使と
天の軍勢・イスラエルの守護天使との
戦いが、繰り広げられていた。

➡ 地上の戦いは、靈的戦いの表出



ペルシア

ダニエル11:2

「今、私はあなたに真理を告げる。見よ。なお三人の王*がペルシアに起こり、第四の者*は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。この者がその富によって強力になったとき、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる*。」

*カンビュセス ➡ スメルディス

➡ ダリヨス・ヒュメタスペス

*クセルクセス

*サラミスの海戦でギリシャに敗退



ペルシア以降のイスラエルの支配者

11章	帝国	王	事件
2節	ペルシア		帰還、神殿再建
3～4節	ギリシア(マケドニア)	アレクサンドロス	ギリシャ文化との遭遇
5～20節	プトレマイオス朝 エジプト		ギリシャ文化の浸透
21～35節	セレウコス朝シリア	アンティオコス ・エピファネス	ギリシャ文化の強制 大迫害
	ローマ		メシア初臨
36～39節	反キリストの帝国	反キリスト	最後の大迫害 メシア再臨

アケメネス朝 ペルシア帝国

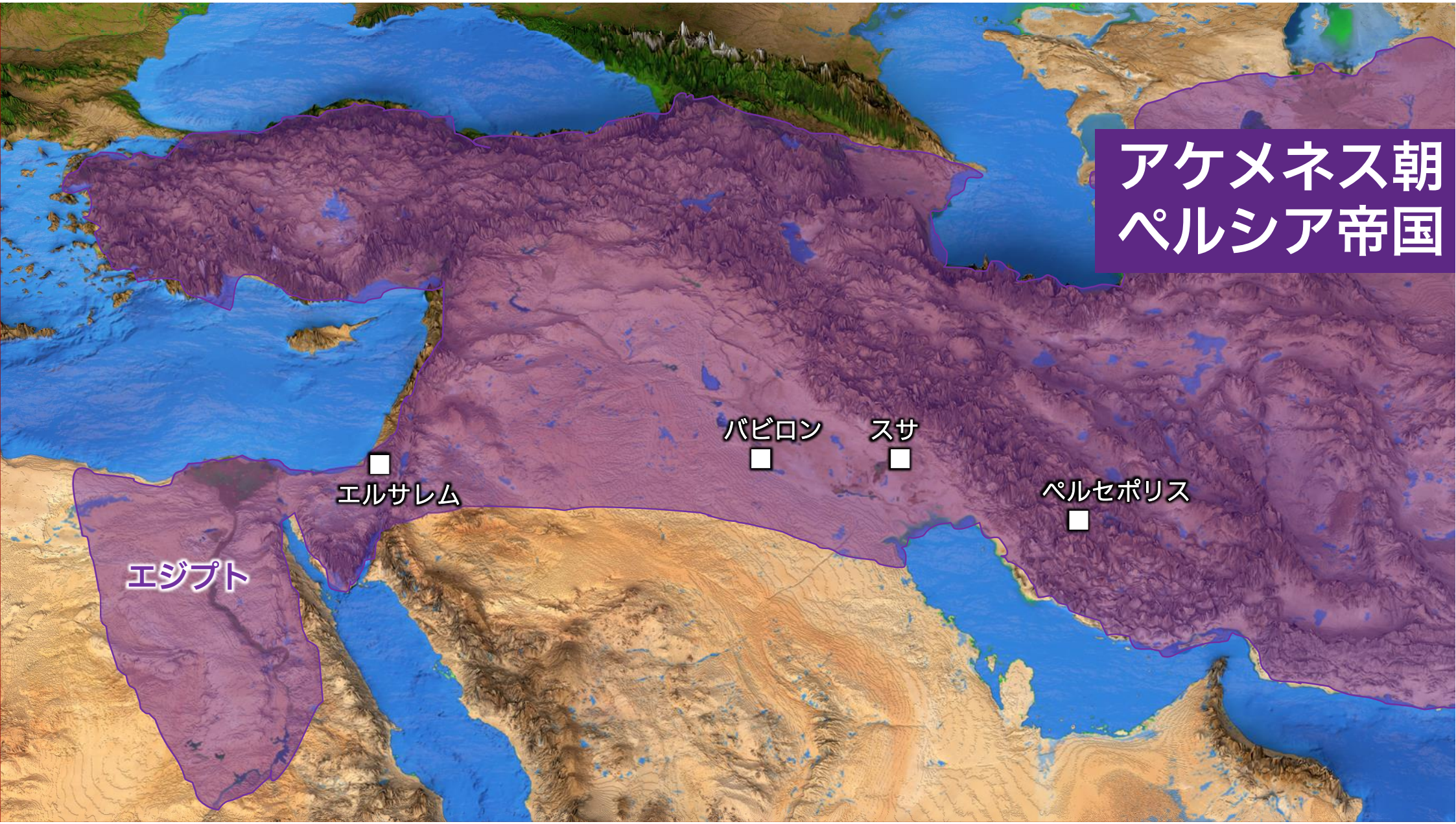
エルサレム

エジプト

バビロン

スサ

ペルセポリス



ギリシア

ダニエル11:3~4

一人の勇敢な王*が起こり、大きな権力をもって治め、思いのままにふるまう。

しかし彼が起こったとき、その国は崩壊し、天の四方に向けて分割される。その国は彼の子孫のものにはならず、また、彼が支配したほどの権力もなくなる。彼の国は根こそぎにされ、その子孫以外の者のものとなる。

*アレクサンドロス

➡一代で世界帝国を築くが若くして死去





アレクサンドロス大王の大遠征

アレクサンドロスの死後



リュシマクス朝

カッサンドル朝

アンティゴノス朝

プトレマイオス朝

エルサレム

Seleucus Flees to the Court of Ptolemy

ペルシア以降のイスラエルの支配者

11章	帝国	王	事件
2節	ペルシア		帰還、神殿再建
3～4節	ギリシア(マケドニア)	アレクサンドロス	ギリシャ文化との遭遇
5～20節	プトレマイオス朝 エジプト		ギリシャ文化の浸透
21～35節	セレウコス朝シリア	アンティオコス ・エピファネス	ギリシャ文化の強制 大迫害
	ローマ		メシア初臨
36～39節	反キリストの帝国	反キリスト	最後の大迫害 メシア再臨

プトレマイオス朝エジプト

ダニエル11:5

南の王*が強くなる。しかし、彼よりもその軍の長の一人が強くなり、彼の権力よりも大きな権力をもって治める。

*プトレマイオス朝エジプト

■アレクサンドロスが、エジプトに築いたギリシャ植民都市アレクサンドリアの繁栄

➔多くのユダヤ人も強制移住

➔ギリシャ文化の影響がイスラエルに!!

(※後に誕生するのが七十人訳聖書)



プトレマイオス朝エジプト

ダニエル11:6

何年かたって、彼らは同盟を結ぶ。和睦をするために南の王*の娘が北の王*に嫁ぐが、彼女の勢力は保たれず、彼の勢力も続かない。彼女は、自分を連れて来た者、自分を生んだ者、そのころ自分を力づけた者とともに引き渡される。

*プトレマイオス1世 → プトレマイオス朝

*セレウコス1世 → セレウコス朝シリア

■ エジプトからシリアへ政略結婚で嫁いだ
ベルニケは、離縁され、息子と共に殺害。



プトレマイオス朝エジプト

ダニエル11:7～9

しかし、彼女の根から一つの芽が父に代わって起こる。そして北の王の軍に立ち向かい、その砦に攻め入り、これと戦って勝つ。

なお、彼は彼らの神々を、彼らが鑄た像や、銀と金の尊い器とともにエジプトに捕らえ移す。彼は何年かの間、北の王と関わりを持たない。

しかし、北の王は南の王の国に侵入し、そして自分の地に帰る。

- 北の王国・セレウコス朝シリアが勢力拡大
- 南の王国・プトレマイオス朝エジプトと拮抗



ペルシア以降のイスラエルの支配者

11章	帝国	王	事件
2節	ペルシア		帰還、神殿再建
3～4節	ギリシア(マケドニア)	アレクサンドロス	ギリシャ文化との遭遇
5～20節	プトレマイオス朝 エジプト		ギリシャ文化の浸透
21～35節	セレウコス朝シリア	アンティオコス ・エピファネス	ギリシャ文化の強制 大迫害
	ローマ		メシア初臨
36～39節	反キリストの帝国	反キリスト	最後の大迫害 メシア再臨



リュシマクス朝

カッサンドル朝

セレウコス朝の台頭

アンティゴノス朝

セレウコス朝

プトレマイオス朝

プトレマイオス朝エジプトの繁栄

プトレマイオス朝エジプト

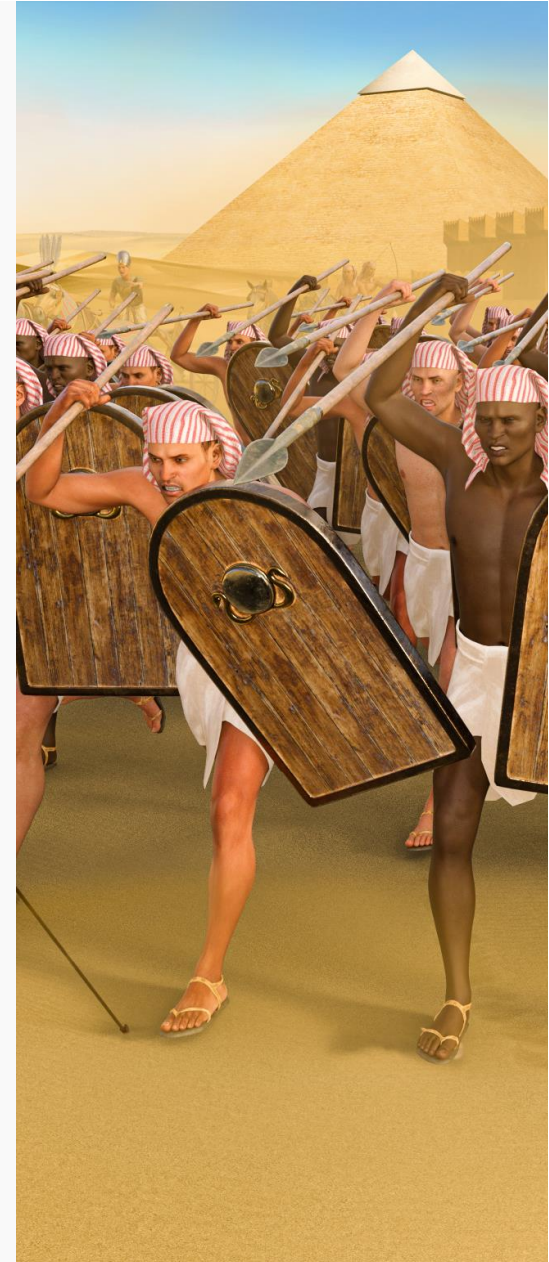
ダニエル11:10～11

しかし、その息子たちは戦いを仕掛け、おびただしい数の強力な大軍を集める。進みに進んで押し流すように越えて行き、そうしてまた敵の砦に戦いを仕掛ける。

南の王は大いに怒って戦いに出て来て、彼と、すなわち北の王と戦う。北の王はおびただしい大軍を起こすが、その大軍は敵の手に渡される。

その大軍を打ち破ると南の王の心は高ぶり、数万人を倒す。しかし、勝利を得ることはない。

■南北の大国間の争いは、ますます激化していった



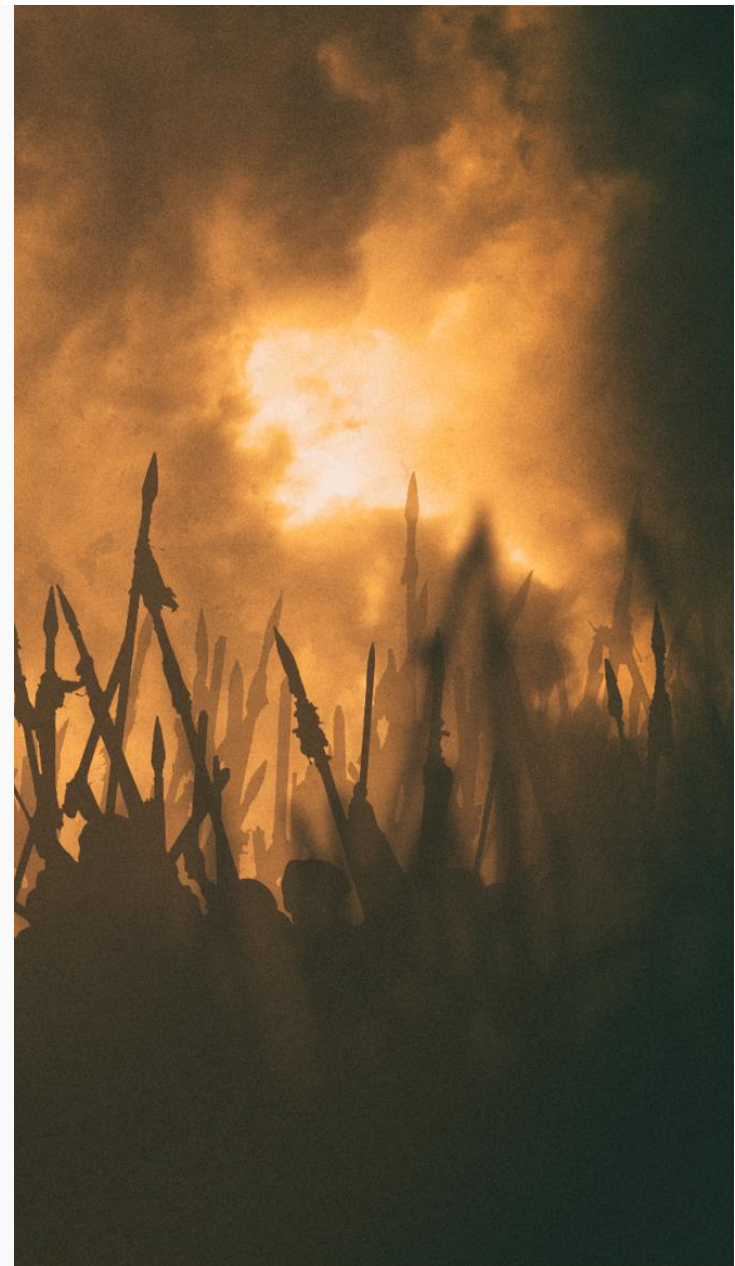
プトレマイオス朝エジプト

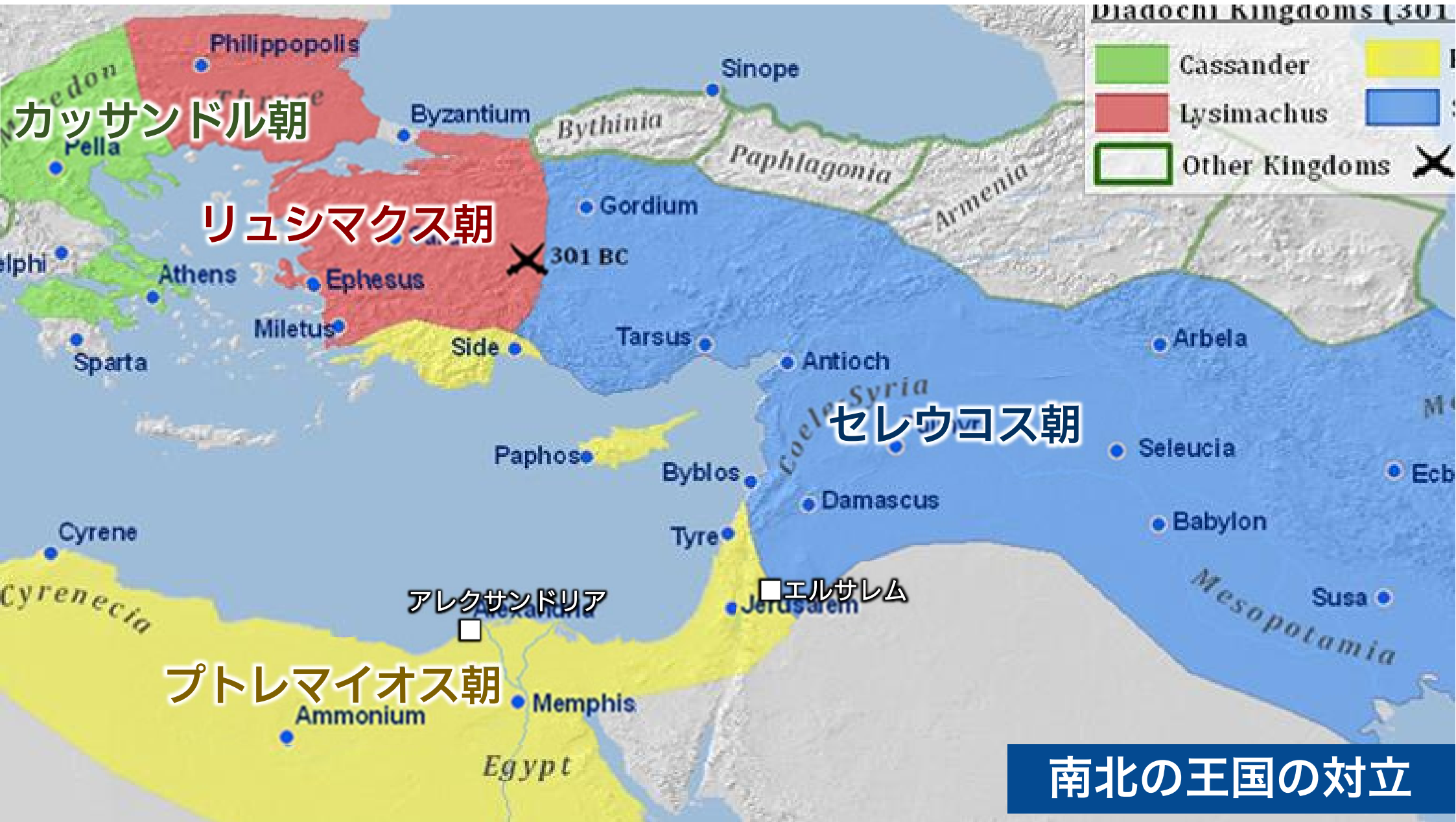
ダニ11:13~14

北の王が再び、以前より大きな、おびただしい大軍を起こして、何年かの後、大軍勢と多くの武器をもって攻めて来るからである。

そのころ、多くの者が南の王に反抗して立ち上がり、あなたの民の暴徒たち*も、高ぶって幻を実現させようとするが、失敗する。

*南北の戦いの隙を突き、独立しようとしたイスラエルの武闘派の試みは失敗





南北の王国の対立

セレウコス朝シリア

ダニエル11:15～17

しかし、北の王*が来て壘を築き、城壁のある町を攻め取ると、南の軍勢は立ち向かうことができず、精兵たちでさえ立ち向かう力がない。

そのようにして、これを攻めて来る者は思いのままにふるまう。彼に立ち向かう者はいない。彼は麗しい国*にとどまり、自分の手で滅ぼし尽くそうとする。

彼は自分の国の総力を挙げて攻め入ろうと決意し、まず相手と和睦して娘の一人を与え、その国を滅ぼそうとする。しかしそれは成功せず、彼の思いどおりにはならない。

■イスラエル*をセレウコス朝シリア*が支配



イスラエルをセレウコス朝シリアが支配



セレウコス朝シリア

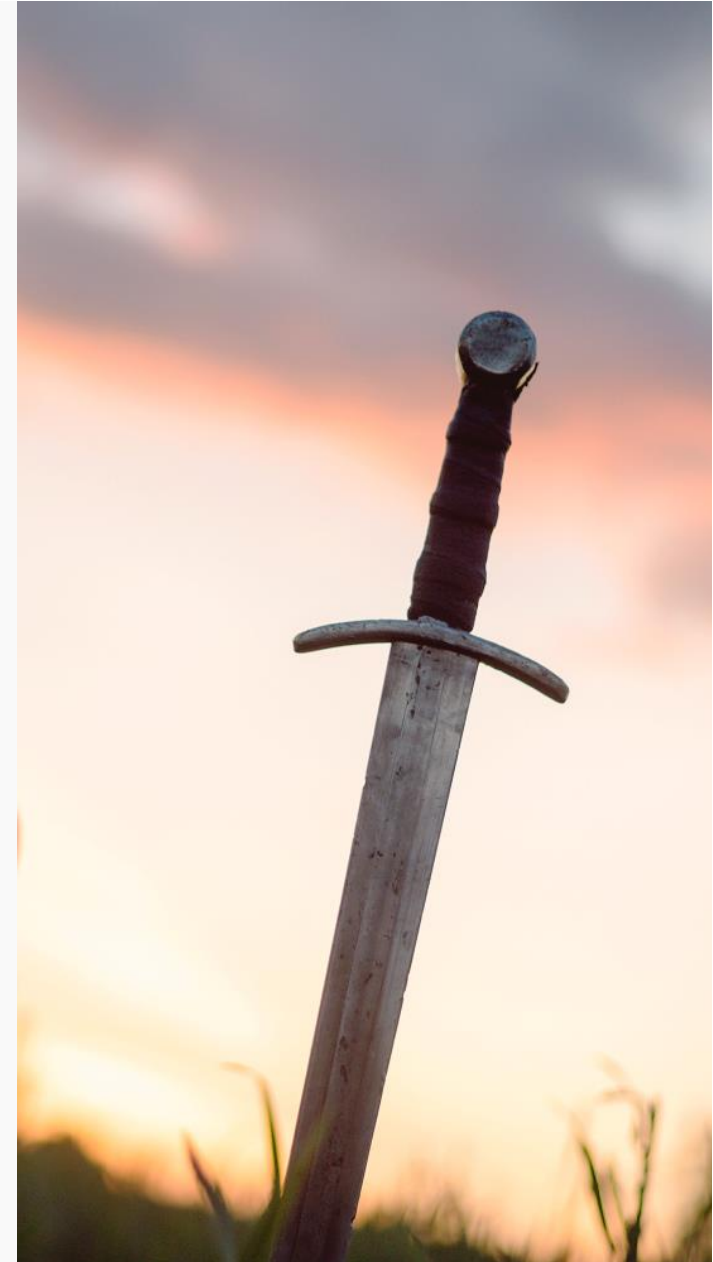
ダニエル11:18~19

それで**彼***は島々に顔を向け、その多くを攻め取る。しかし、ある指揮官が彼に侮辱をやめさせるばかりか、かえってその侮辱を彼の上に戻す。

彼*は自分の国の砦に引き返すが、つまずき、倒れていなくなる。

*アンティオコス3世

➡イスラエルをエジプトから奪ったが…



セレウコス朝シリア

ダニエル11:20

彼に代わって、一人の人*が起こる。彼は国の栄光のために、税を取り立てる者を行き巡らすが、数日のうちに、怒りにも戦いにもよらずに滅ぼされる。

*セレウコス4世

➡民に重税を課し、短期間で殺害された





II. 中間時代のクライマックス

ダニエル書11章21～35節

アンティオコス4世 ダニエル11:21

彼に代わって、一人の卑劣な者*が起こる。彼には国の権威は与えられないが、不意にやって来て、巧みなことばを使って国を奪い取る。

*アンティオコス・エピファネス(現神王)
(アンティオコス4世)

- この頃には、ローマが台頭、セレウコス朝との戦争に勝利、朝貢させる。
➔アンティオコス4世は、幼少時、人質としてローマに。ヘレニズム文化に染まる



影 of the Antichrist

アンティオコス4世 ダニエル11:22～23

彼の前では、洪水のような軍勢も、**契約の君主***さえも一掃されて打ち砕かれる。

彼は同盟を組んだ後で欺き、少ない人数で勢力を増していく。

*ユダヤの大祭司オニアス

…正統な大祭司だったが、4世の力を得たギリシャ派のユダヤ人に退けられる。

■ アンティオコス4世は、奸計を用い、効率的に兵を各地に送り、支配基板を固めた。

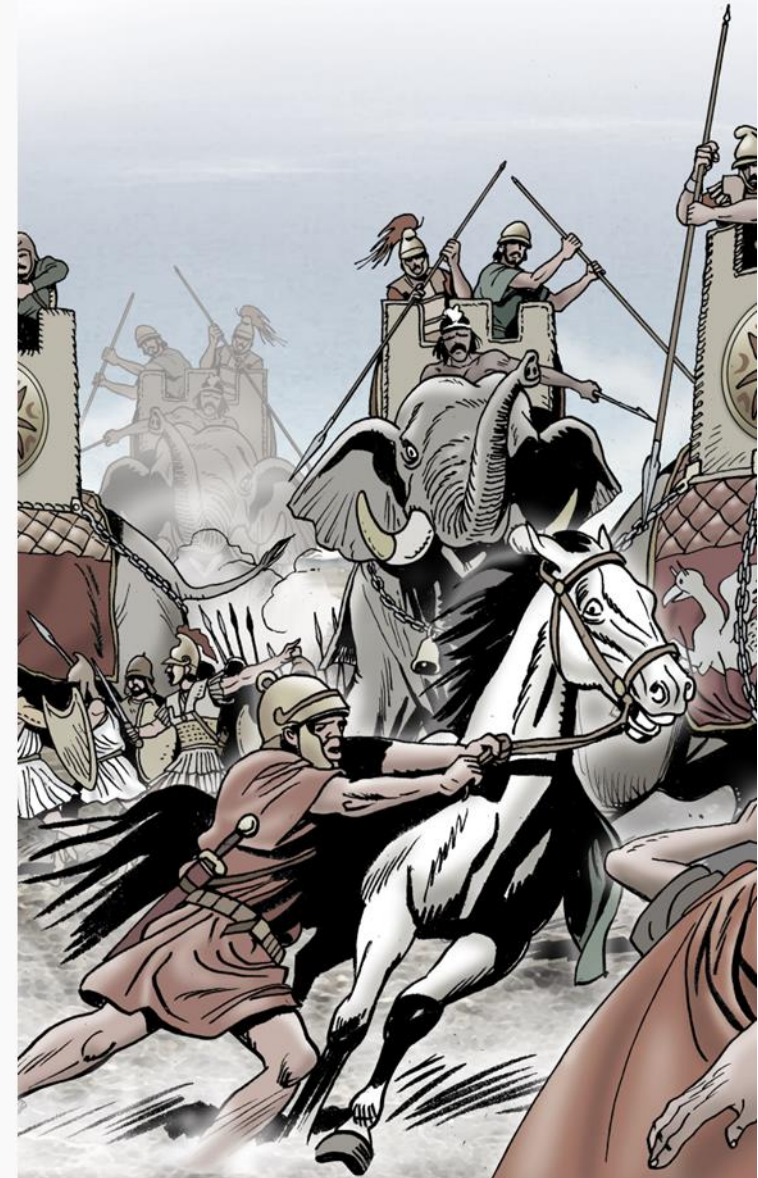


アンティオコス4世 ダニエル11:24

彼は不意にその州の肥沃な地域に侵入し、彼の父たちも、父の父たちもしなかったことを行う。彼は、そのかすめ奪った物、分捕り物、財宝を、自分たちの間で分け合う。彼は計略をめぐらして要塞を攻めるが、それは、時が来るまでのことである。

■ シリア領内・肥沃な三角地帯を完全に制圧
得た富で防衛力を強化。

➔ さらなる勢力拡大・侵略に備えた。



ペルシア以降のイスラエルの支配者

11章	帝国	王	事件
2節	ペルシア		帰還、神殿再建
3～4節	ギリシア(マケドニア)	アレクサンドロス	ギリシャ文化との遭遇
5～20節	プトレマイオス朝 エジプト		ギリシャ文化の浸透
21～35節	セレウコス朝シリア	アンティオコス ・エピファネス	ギリシャ文化の強制 大迫害
	ローマ		メシア初臨
36～39節	反キリストの帝国	反キリスト	最後の大迫害 メシア再臨

アンティオコス4世 ダニエル11:25～26

彼は勢力と勇気を駆り立て、大軍勢を率いて南の王に立ち向かう。南の王も非常に強い大軍勢を率い、奮い立ってこれと戦うが、抵抗することができなくなる。南の王に対して計略をめぐらす者たちがいるからである。

彼のごちそうにあずかる者たちが彼を滅ぼし、彼の軍勢は押し流され、多くの者が刺し殺されて倒れる。

- アンティオコス4世が、エジプトを侵略。
 - ➔ 身内から反逆が出て、侵略は失敗。



アンティオコス4世 | ダニエル11:27～28

この二人の王は、心で悪事を謀りながらも、一つの食卓に着いて、まやかしを言い合う。しかし、成功はしない。終わりは、まだ定めの時を待たなくてはならないからだ。

彼は多くの財宝を携えて自分の国に帰る。彼の心は聖なる契約*に敵対して事を行い、彼は自分の国に帰って行く。

*イスラエルのこと

- アンティオコス4世は、帰国途上、ユダヤ人を略奪し、大虐殺を行った。



アンティオコス4世 ダニエル11:29～30

定めの際に、彼は再び南へ攻めて行くが、この二度目は初めの時のようではない。

キティムの船*が彼に立ち向かって来るので、彼は落胆して引き返し、聖なる契約*にいぎりたって事を行う。彼は帰って行って、その聖なる契約を捨てた者たち*に心を向けるようになる。

*ローマ支配化のキプロスの海軍

*再び、帰国途中にユダヤを略奪

*ギリシャ化した、偶像礼拝のユダヤ人たち



アンティオコス4世 ダニエル11:31～32

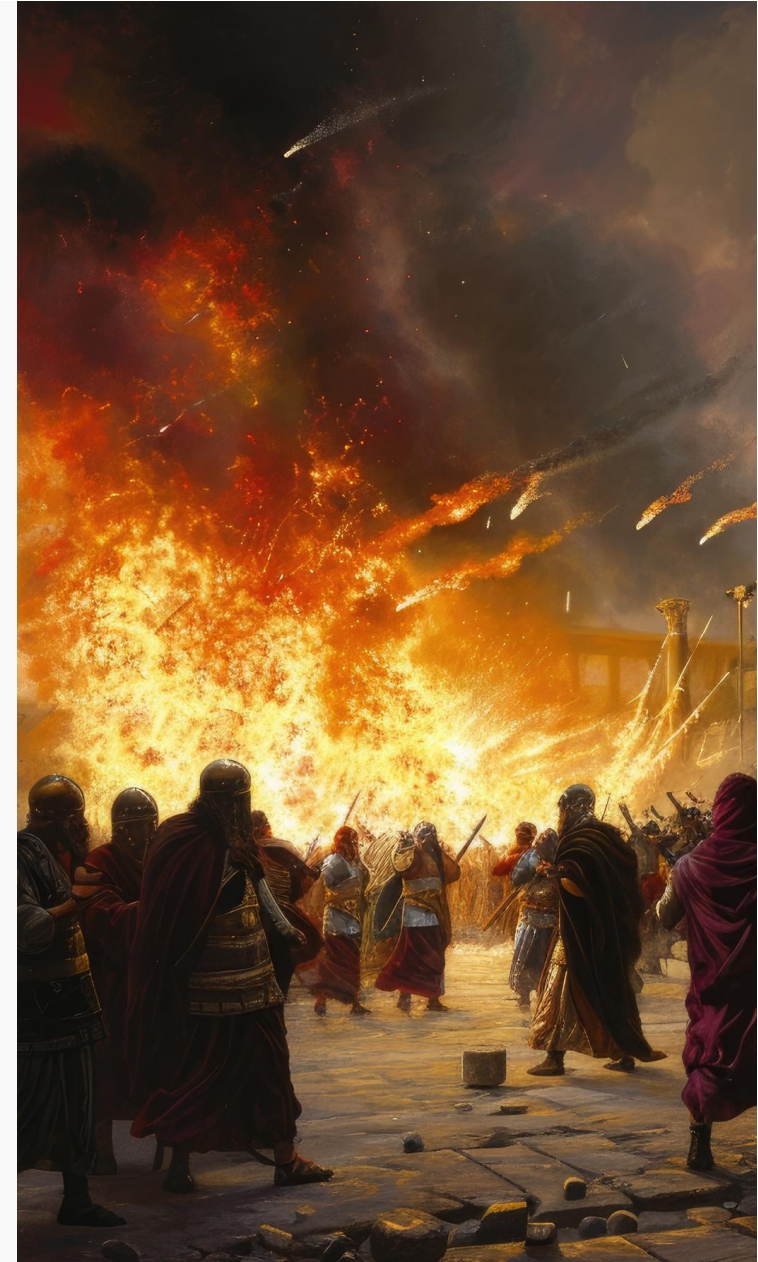
彼の軍隊は立ち上がり、砦である聖所を冒し、常供のささげ物を取り払い、荒らす忌まわしいもの*を据える。

彼は、契約に対して不誠実にふるまう者たちを巧言をもって墮落させるが、自分の神を知る人たちは堅く立って事を行う。

■ アンティオコス4世は、ギリシャ化を強制。
ゼウス神*を神殿に建て、豚を献げたとも。

➡ ユダヤ人は、分裂して対立

ギリシャ派 vs 伝統派



アンティオコス4世

ダニエル11:33

民の中の賢明な者たちは、多くの人を悟らせる。彼らは、一時は剣にかかり、火に焼かれ、捕らわれの身となり、かすめ奪われて倒れる。

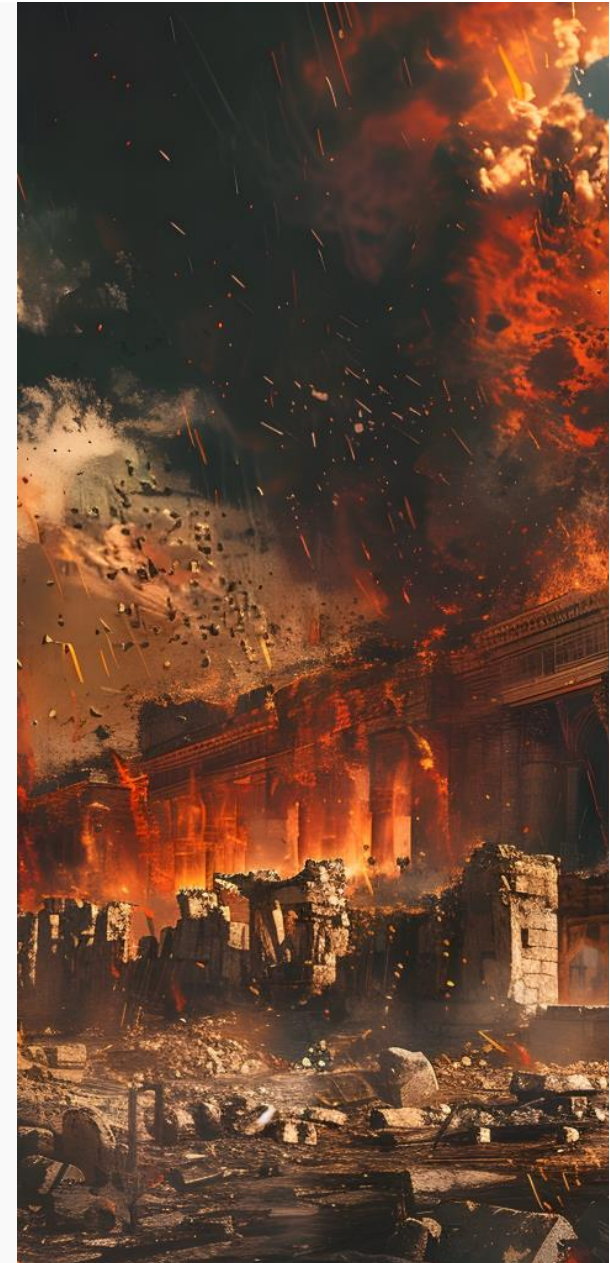
彼らが倒れるとき、彼らへの助けは少なく、彼らにくみする者には巧みなことばを使う者が多い。

■ ユダ・マカベアが反乱を起こし、聖都を奪還。

➔ 8日間の奉獻の祭り(ハヌカの祭りの起源)

■ シリアは衰退、ユダヤはハスモン王朝を起こす

➔ 一時期はソロモンに匹敵する領土を獲得



アンティオコス4世

ダニエル11:35

賢明な者たちのうちには倒れる者もあるが、それは終わりの時までには、彼らが錬られ、清められ、白くされるためである。それは、定めの時はまだ来ないからである。

■ 11章の預言の第一の目的

➔ 中間時代のイスラエルへの励まし

■ 第二の目的

➔ 終末の大艱難に至るまでの励まし

※次回・11章36節～12章で告げられる



メシア誕生前夜のイスラエル

- ハスモン王朝は、シリア、エジプトの衰退の際に勢力拡大。
→ エドムの末裔、イドマヤ人を支配、ユダヤ教に強制改宗
- ハスモン王朝内部の対立激化。血で血を洗う抗争も!!
ギリシャ派の**サドカイ派** vs 伝統派の**パリサイ派**
- ローマが台頭、イスラエルを支配。ハスモン王朝の分断の際に、
イドマヤ人の**ヘロデ大王**がローマの傀儡としてエルサレムの王に!!

かつてないほど高まった、メシア待望



Ⅲ. まとめと適用

メシアを待ち望む信仰をもって

中間時代の聖書的意味

■ 対立した二つの価値観

ギリシャ v s ユダヤ

人間中心 v s 神中心

※完全なギリシャ化、ユダヤ抹消を企てたアンティオコス4世

■ ペルシア → ギリシャ (プトレマイオス、セレウコス) → ローマ
度重なる苦難の中で高められていった、**メシア待望**

旧約聖書 → 中間時代 → 新約聖書 ついにメシアが誕生!!

教会時代の苦難の聖書的意味

- メシアは来られ、イスラエルの贖いを成し遂げられた。
→ 教会が誕生。福音は、ユダヤ人から異邦人へ。
- 教会時代は、最後の一人が救われる瞬間まで続く、
信じた者は、試練の中で錬られ、成長させられていく。
- 終末に起きるのが、携拳、大艱難、イスラエルの回心、再臨。
終末に向け、光と闇の戦いは激化し、緊迫感は増していく。

教会と信者は、試練の中で育まれ、メシア待望を強めていく

神の時と人間の時

■ 聖書預言のすべては、すぐに起きることとして告げられている。

➔ だからこそ、聞いた者の心に鋭く刺さった

■ すべての預言は、神の時が来れば、すぐに実現される。

直近のことも、何百年後のことも、はるかな終末のことも

➔ 時間を超越し、歴史を支配される神に、時の長さは無関係

■ 終末は、徐々に迫っているのではない。

神が定めた時が来た瞬間、速やかに実現される

私の生きた痕跡を残そう

■ 死なのか。携拳なのか。その時は、神が決められた瞬間に来る。信者の課題は、証しを残すこと。

■ ネット上の動画、手紙、文書、映像、いろんな手段があっても、一番確かなのは、誰かに直接、私の生きた証しを残すこと。

■ 携拳はどんなこと？ 案外、極めて静かに起こるのでは？ 異変に気づき、心を開かれるのは、あなたに近しい人なのでは？ あなたの死に際して、残された人も同様だろう。

★ 福音宣教の使命に遣わされよう ★

- 聖書の言葉が私たちの心を揺さぶるのは、
一人の信仰者が生き抜いた、確かな証しだから。
「走り抜いた」と宣言できるほど、仕え通した人生だったから。
- 世の選挙で、なんとか痕跡を残そうと奔走する人々の姿がある
福音を告げる私たちが、彼ら以下の働きでよいだろうか？
- 家庭で、仕事場で、日常のあらゆる機会を用いて痕跡を残そう。
機会を捉えて福音をあなたの口で伝えていこう。

てん とう つみ
「天のお父さま。わたしの罪をゆるしてください

かみ こ
わたしは、神のみ子イエス・キリストが、

① わたしの罪を贖うために十字架で死に、

はか ほうむ
② 墓に葬られ、

みっかめ ふっかつ しん
③ 三日目に復活したこと、を信じます。

かこ よげん しゅ つ とお じょうじゅ
過去の預言はすべて、主が告げられた通り、成就されました。

しゅ とき く のこ よげん じつげん
主の時が来れば、残る預言もすべて、すみやかに実現されます。

しゅんかん むね きざ ふくいん つ し つか
その瞬間を胸に刻み、福音を告げ知らせるべく、遣わされます。

ひとびと すく しゅ しめい い こんせき のこ
人々の救いのため、主の使命に生きた痕跡を残せますように、

しゅ な いの
主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」